

郷土の音環境文化の伝承と創造

遠州波小僧プロジェクトのサウンドエデュケーション

Transmission and creation of local sound environment culture
Sound Education in Enshu-Namikozo Project

兼古 勝史（放送大学）、大門信也（関西大学）
箕浦一哉（山梨県立大学）、岩田茉莉江（おとたまり）

Katsushi Kaneko(The Open University of Japan), Shinya Daimon(Kansai University),
Kazuya Minoura(Yamanashi Prefectural University), Marie Iwata(Ototamari)

（キーワード）

サウンドエデュケーション、篠原町、波小僧、音環境文化、音さんぽ

1. 遠州波小僧プロジェクト

「遠州波小僧プロジェクト」は、遠州沿岸に伝わる「海鳴り／波小僧伝承」をてがかりに、この地の特徴的な音風景である遠州灘の波音について調査研究を行うプロジェクトである。

本稿では、同プロジェクトの一環として、地域の子どもたち（及びその保護者）を対象に実施した2つのサウンドエデュケーションについて報告する。

2. 地元小学校「総合」授業での実践

(1) 概要 波小僧伝承のエリア内沿岸部にある浜松市立篠原小学校にて、2023年5月23日午後、第3学年の全校生徒を対象にした合同「総合」授業（第5・6時限）で、郷土教育の一環としてサウンドエデュケーションを実施した。波小僧プロジェクトメンバーの3名（大門、箕浦、兼古）が講師を務めた。遠州灘の波音という、生徒にとって身近な環境を題材とし、生徒がみずからの耳で感じる体験を通じて、郷土文化や身の回りの環境への気づきや興味を促すとともに、身近な環境や地域の文化について自ら調査し、表現する取り組みへとつなげる導入として位置づけた。内容を以下に記す。

1) 音あてクイズ（13分）

（町内踏切の音、篠原海岸の波音等をクイズ形式で出題、正解を当てる）

2) イヤークリーニング

（屋上に移動し耳を澄ます、課題は「一番遠くの音」を見つける、教室に戻り話し合う）

3) 遠州灘の波音についての話

（波小僧伝承、遠州の自然環境が生み出す海鳴りの物理的特性について平易に解説）

4) 各クラスでの振り返り

（クラスごとに担任の指導で振り返り、各教室に講師を一人ずつアドバイザーとして配置）

(2) 児童の反応・コメント

児童たちのふりかえりシートの分析から以下の点が見えてきた。

- ・波音による観天望気や波小僧伝承について、はじめて知ったという児童も多い。
- ・身の回りの環境音への関心と気づき（遠近、方位、大小、多様性）がもたらされた。
- ・地域の探求への意欲が促進された。
- ・波音・波小僧・海への関心・興味が高まったことから波音や波小僧伝承等の郷土の文化や身近な環境について、一定の気づきや知的な興味を促すことができたと思われる。

3. 音さんぽ in 浜松篠原海岸

(1) 概要

遠州灘の篠原海岸（浜松市西区篠原町）にて、

2023年10月29日午前に「音さんぽ」ワークショップを実施した。「音さんぽ」は岩田茉莉江（音風景研究家／「おとたまり」主宰）が実践する「音を感じながら散歩をして、五感をひらく」サウンドエデュケーションである。岩田が講師・ファシリテーターを務め、波小僧プロジェクトの3名がサポートする形で、企画内容については、岩田がこれまで培ってきた手法を波小僧プロジェクトメンバーと打ち合わせをしつつアレンジして作成した。対象は浜松市内の小学生と保護者で、5組10名が参加した。参加者一人ひとりが遠州灘の海辺の風景に耳を澄まし、五感を開き、自らの身体で浜の豊さを体験するとともに、体験を自分なりに表現することを目指した。内容を以下に記す。

1) 耳のたいそう

（波音の違いを聴く、砂浜に寝転んで聴く）

2) ブラインドウォーク

（目隠しをして砂浜を歩いて移動）

3) 音れんぼ

（音を用いたかくれんぼ、目隠しをして音具や浜辺の素材の音を鳴らす鬼を捕まえる）

4) 浜の昔語り

（地元歴史研究会「浜風会」シニアメンバー有志による浜の昔の様子や遊びなどの話）

5) 砂浜スケッチ

（波音を聞いて自分なりに砂浜に絵で表現→参加者で共有）

6) 音絵日記

（体験した音を模様と言葉で画用紙に記述→参加者で共有）

7) 浜辺の即興演奏

（各自が体験した音風景を、あらかじめ用意した様々な音具や浜辺の環境素材を用いてそれぞれに表現しつつ全員で即興で合奏）

8) 「波小僧」紙芝居朗読

（ファシリテーターが自ら描いた絵による紙芝居を浜辺で朗読）



図1 「音さんぽ」の様子

左上：耳のたいそう

左下：砂浜スケッチ

右上：音れんぼ

右下：音絵日記

(2) 概要

前半の「耳のたいそう」～「音れんぼ」の活動では自らの身体をメディアとして浜の多様な表情を感じ取ることができた。中盤の「浜の昔語り」では、砂浜の下に潜むカニの見つけ方など、浜の遊びなどの文化を参加者で世代を超えて共有することができた。後半の「砂浜スケッチ」「音絵日記」「即興演奏」では、体験した音や情景を自分なりの方法で表現、音や音具を自ら発見したり、従来とは違う鳴らし方を工夫するなど創造的な表現が見られた。こうした活動と共有を通じて知識や説話としての海鳴り・波小僧伝承にとどまらない「今・ここ」ならではの波音との関係を構築する第一歩とできた。遠州灘の波音・波小僧を題材とした2つサウンドエデュケーションによって、地域の音環境への知的興味の醸成と体験を通じた新たな表現活動につなげることができた。こうしたサウンドエデュケーションの取り組みが、波音と地域住民との新たな関係性の構築、すなわち郷土の音環境文化の本質的な意味での伝承と創造に寄与するものと考えられる。

※本実践は、JSPS 科研費 20K02174 の助成を受けた共同研究の一環として実施された。